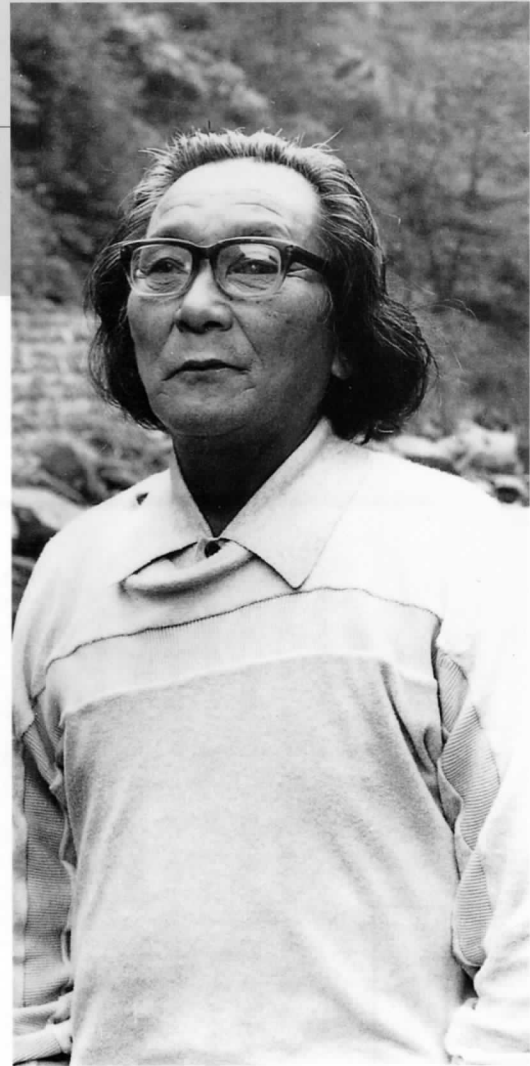


新 歌人群像

山崎方代

大下一真



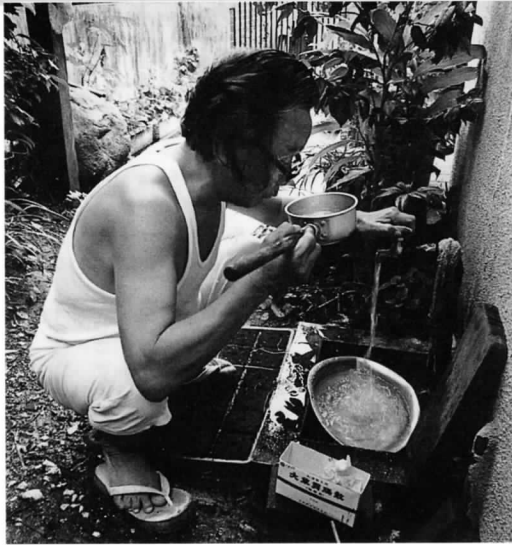
失明 歌との出会い

山崎方代、「やまざきほうだい」と読む。男性。一九一四年十一月一日、山梨県東八代郡右左口村（現・中道町）に産声を上げた男の子は、両親にとっては八番目の子だったが、その兄妹たち五人が早世したので、親は「生き放題、死に放題、勝手にせよ」と「ほうだい」と名づけたのだという。生れ、名前からして一風変わっているが、それから歩んだ人生もまた変わったものであった。

方代二十四歳の一月、母のけさのが亡くなったのが契機で、老いて眼疾に悩む父とともに

に、横浜の姉の嫁ぎ先の歯科医院に身を寄せた。姉は弟に職を探すが、そのどれも長続きしなかった。甲州の山村では野良仕事にいらしてんで父母を支えていたというが、都会の仕事は肌にあわなかったのだろうか。よく解らない。歯科技工士として甥の手伝いをしていた一時期を除けば、方代は、定職と呼べるものには終生就いたことがない。やがて、第二次世界大戦の戦線の拡大とともに、召集される。終戦により帰還した時には、南洋チモール島での戦場で砲弾片を浴びた右目は失明、左目は視力0・01となっていた。戦後の混乱する社会を、視力の乏しい人間がどう生き抜いたか。歌われた短歌作品から想像、推測

2001.5



朝庵の州

するしかない。

ここで山崎方代の短歌の出発について振り返ると、右左口村の時代から短歌に親しみ、仲間と雑誌を出したり、「山梨日日新聞」など地元紙に投稿してたびたび入選したりもしていた。故郷を離れる頃は、山下陸奥主宰の「二路」に拠っており、山中湖畔で開かれた「二路」の全国大会にも出席したし、上京して山下陸奥を訪ねたこともあった。それなりの気負いを持った文学青年とあって良いだろう。

戦地から帰還した方代は、まず山下陸奥を訪ね、作歌を再開する。陸奥のもとに集った若い仲間たちとも、交流を深める。そして、

この若い仲間たちが陸奥から離れて「工人」という同人誌を創める時、方代も従う。

ゆくところ迄ゆく覚悟あり夜おそくけ
もの皮にしめりをくるる
おから寿司水と一緒にのみおろし売ら
れゆく娘にマフラを投げる
宿無しの吾の眼玉に落ちて来てどきり
と赤い一ひらの落葉
フランソア・ヴィヨンの詩鈔をふとこ
ろに一ツ木町を追われゆくなり

これらは、一九四八年から五〇年にかけての「工人」に発表された作品である。おおよその暮らしぶりは推察されよう。放浪、浮浪に近い生活の中で、しかし、方代は歌い続けた。フランソア・ヴィヨンの詩に親しんだのはこの時代のこと、全体に都会派と呼んではいい作風である。作品からどんなダンディな奴かと思っていたら、全然イメージと違うのでびっくりしたとは、長い交わりを後々まで持つことになった岡部桂一郎氏の第一印象だったと聞く。

方代伝説

歌い続けた方代だが、必ずしも高い評価を

得たわけではない。一九五五年、初めての歌集『方代』を出した。知人に配り、これはと思うところには自ら持参して呈した。残りは駅頭で道行く人に手渡したというのは、今や伝説になった話だが、唯一、会津八一から賞賛の葉書が届いたのが、勲章であった。

堅気でない暮らしを案じた姉が、園科技工士として身を立てるようにはからい、一時はそれに従った方代だが、六五年、姉が亡くなったのを機に横浜の甥の家を出て、ふたたび定収入なしの生活となる。別荘の留守番、農家の手伝いなどが、口に糊する方途だった。そのかわり、歌人吉野秀雄に親近し、頻繁に訪ねる。方代は秀雄を「先生」と呼んでいるが、師弟関係というより、人間的な交わりというものが正しいだろう。

「先生」吉野秀雄が、一九六七年七月に逝去。「短歌」十月号では吉野秀雄追悼がなされるのだが、何の因縁か、ここで方代は五十首の発表の場を得る。

寂しくてひとり笑えば茶ぶ台の上の茶
碗が笑い出したり
焼酎の酔いのさめつつみておれば障子の
棧がたそがれてゆく
ねむれない冬の畳にしみじみと己の影
を動かしてみる

山崎方代

「方代の歌」と題された五十首の、巻頭の三首である。不思議めく生活とそこから生れた孤独感。だがどこか温かく、懐かしいこの一連は、未知の読者に強烈な印象を与えた。

そして、翌年九月十五日の「毎日新聞」には、やはり「方代の歌」と題する五首が載せられた。

手のひらに豆腐を乗せていそいそといつもの角をまがりて帰る
足もとに生れたる風一枚の木の葉たち
まち裏がへしせり

作品と併せて、方代が当時住んでいた農家の農機具小屋を背景に腕組みしている写真が掲載され、特異な生活と作風は、多くの人々の脳裏にしっかりと焼きつくことになった。急ぎ足で、この後の人生を見る。

一九六九年十一月 大西民子、清水房雄、長澤一作、河野愛子、山崎一郎と、合同歌集『現代』出版。

一九七二年七月 中華料理店経営の根岸氏の厚意により、鎌倉市手広の根岸家の庭に建てられた庵に転居。方代艸庵と名づけ、終の住居となる。

一九七四年二月 第二歌集『右左口』上梓。
一九七五年三月 「短歌」愛読者賞受賞。

一九七八年九月 鎌倉駅前のギャラリーにて「山崎方代・写真と歌墨展」開催。

一九七九年八月 山梨放送「ふるさとは今」に出演。

一九八〇年三月 山梨県牧丘町の加田邸庭に歌碑建立。

十月に第三歌集『こおろぎ』刊行。

一九八一年三月 自選歌集『首』刊行。

四月、右左口スポーツ広場に歌碑建立。

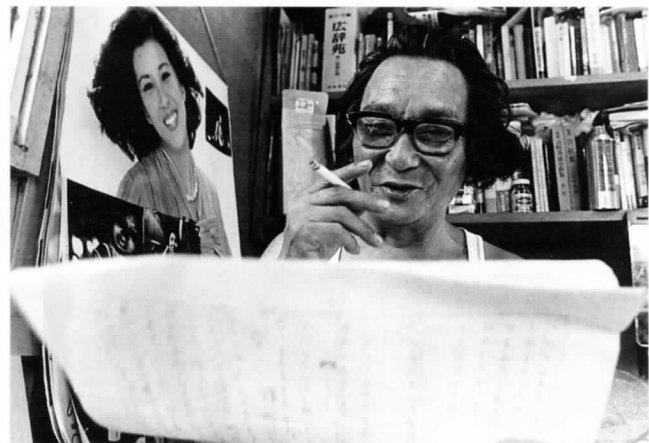
十二月、随想集『青じその花』刊行。

以上が、山崎方代の後半生のあらましである。一九六七年十月号の「短歌」以降、方代は歌人としてしかるべき評価を得たと言える。生涯をつらぬく定職を持たず、妻子を持たず、家を持たず、酒とたばこを愛した歌人は、一九八五年八月十九日、肺ガンによる心不全のため逝去。七十一歳であった。没後の十一月、第四歌集『迦葉』が上梓された。

骨壺の底にゆられて

わからなくなれば夜霧に垂れさがる黒
きのれんを分けて出でゆく

『方代』の巻頭の一首。誰もが混沌の中にあつた時代。分けて出てきたのれんの先にも



艸庵にて

何があるというわけではない。後の方代の人を象徴するような一首。

不貞不貞と畳の上に投げ出せし足とい
えどもせつなかりけん
茶碗の底に梅干の種二つ並びおるああ
これが愛と云うものだ
ゆえしらぬ涙は下る朝の日は茶碗の中
のめしを照せる

『方代』から。孤独感がにじむ。「足といえどもせつなかりけん」には足への労りがあり、茶碗の底の梅干の種二つは、どこか微笑ましい。次は『右左口』から。



親しい酒屋さんで (撮影・湯川晃敏 P.61、62も)

生れは甲州鷺宿峠おつしやまどに立っているなんじやもんじやの股からですよ
 こんなところに釘が一本打たれていじればほとりと落ちてしまうた
 こんなにも湯呑茶碗はあたたかくしどろもどろに吾はおるなり
 望郷、孤独の情は、多くの人々の共感を呼

ぶ。誰もが内側にそういう虫を一匹は飼っているからだろう。一方で、「股からですよ」「落ちてしまった」というような、口語調の言い回しは親しみやすい。方代が生み出した独自の文体である。

手のひらをかるく握ってこつこつと石の心をたしかめにけり
 卓袱台ちやくぶだいの上の土瓶に心中をうちあけてより楽になりたり
 ふるさとの右左口郷うはくちむらは骨壺の底にゆられてわがかえる村
 一度だけ本当の恋がありましたて南天の実が知っております

『こおろぎ』からとりあえず四首。「石」「土瓶」も「茶碗」とともに方代の大事なキーワードである。方代は、石とも心を通わすことができる。また、土瓶、茶碗は数少ない艸庵の同居人である。「本当の恋」と「南天の実」の取り合わせは、まさに絶妙。読者をほのぼのとさせるこれらの作品に混じる「ふるさと」の歌は、故郷のスポーツ広場の歌碑に刻まれた方代の代表作とも言える作品。

北斎は左利きなり雨雲の上から富士を書きおこしたり

おかたみの二枚屏風も質流れ質の流れは音なかりけり

一方で『こおろぎ』には、このような傾向も見せている。「懐かしい」世界だけではない、別の面が加わり始めているのである。

一粒の卵のような一日をわがふところに温めている
 ことごとと小さな地震なが表から入って裏へ抜けてゆきたり

『迦葉』から。微笑ましさ、温かさは変わらない。だが、別の世界も見せている。

膝間に短い竿を付けておるキリスト様は男なりけり
 机の上に風呂敷包みが置いてある風呂敷包みに過ぎなかつたよ

謎めいた、しかしよく読めば面白い。

山崎方代はこの先、どういう方向に向かって進みたかったのだろうか。だが、『迦葉』は遺歌集となつてしまった。

没後の一九九五年、『山崎方代全歌集』が刊行され、今でも新しい読者を呼んでいる。

(おおした・いっしん「まひる野」)